

ヨアヒム バウアー (Joachim Bauer)

「少年の攻撃や暴力の予防：司法は脳に関する研究から何を学ぶのか？」

Joachim Bauer, Prävention von Aggression und Gewalt bei

Jugendlichen: Was kann die Justiz von der Hirnforschung lernen?

岡田 行雄 訳

近年、神経学に基づく観点から、人間に特有の攻撃や暴力に影響を与える諸要素が認識されるようになった。かつて、ジグムント フロイト (Sigmund Freud) によって、第一次世界による恐怖の痕が生々しく残る中で定式化され、コンラート ローレンツ (Konrad Lorenz) を通して研ぎ澄まされた、「攻撃衝動」のテーゼは、神経生物学 (neurobiologisch) 的な観点からは最早支持され得ないことが明らかとなったのである。

また、比較的新しい社会心理学から生じ、ナチによる支配、実際の政治的暴力の勃発あるいは騒乱を参考にしつつ、人間に特

有の暴力を、その背景を探ることができない、人類学上一定のもの (Konstante) と定義する理論も、「神経生物学を通して獲得された…訳者補充」この新たな認識に道を譲らざるをえない。以下の小論は、司法が、攻撃や暴力の予防をテーマとする、近時の脳に関する研究から何を学ぶことができるかを示そうとするものである。

攻撃は神秘的な現象ではなく規則的なものである

暴力の勃発は、学校での騒乱と同様に、しばしば私達を啞然とさせる。そして、しばしば、私達は、まず、その免責されない出来事について「説明」しよう（もつとも、説明によって、その出来事は若干単純化される）とする不当な要求に身を任せることを、当然ながら、拒む。しかし、他方で、私達は、攻撃は神秘的な現象ではなく規則的なものであるという見方から逃れることはできないようになる。もつとも、攻撃や暴力に影響を与える要素を調査し、それらを提示することは、当該行為について行為者に責任能力がないということを意味するわけではない。精神面で平均的な健常者は、自らを制御する能力というべきもの―それは神経生物学的に根拠づけられる―を有している。そうした能力は、私達がそれぞれの仲間に、彼ないし彼女がそれぞれの内面に生じる暴力で問題を片づけたいという衝動をコントロールすることを、正当にも期待する基盤となっているのである。

どのような動機づけ―かつて私達はそれを「欲求」(Trieb)と呼んでいた―が、人の振る舞いを制御するのにかについて、現在では、直感―それは様々な社会心理学上の理論の不備である―に基づいて答えを出すことははや許されない。人間的な動機

づけは、いわゆる動機づけのシステムにおいて、ある種の神経生物学的な基盤を有しており、こうしたシステムに先んじる形では動機（及び「欲求」）は存在し得ない。精神面で平均的な健常者である私達が、挑発をしたわけでもない他の人々を傷つけた痛みたりすることは、「動機づけのシステム」という観点からはつりあわない―大それたことなのである。確かに、精神病的な障害を有する者の場合、私が、二〇一一年に公刊された「苦痛の限界」(Schmerzgrenze)という著作で詳しく検討した、ある種の特異性が見られる。しかし、精神面で平均的な健常者の動機づけのシステムという観点から「価値がある」とことは、社会において受け入れられる、まわりから承認される、ある集団に帰属していると感じられる、ないしは愛されることなのである。こうして、最近の神経生物学は、チャールズ・ダーウィン(Charles Darwin)が人間の最も強い欲求を「社会的な本能」として提示したこと(ダーウィンは攻撃について検討を加えたが、「攻撃欲求」なるものを探そうとの取り組みは無駄に終わった)を正しいものと確証している。

動機づけの中心…社会的な受容と帰属

子どもや少年は何かに帰属することを切望するものである。子どもや少年が、共に歌い、楽器を奏で、スポーツを楽しむということの中に、社会がこうした要求をどのようにして適切に

受け入れ得るのかという問いの答えがある。しかし、人間的な動機づけが社会的に受容される方向を向いているとしても、そのことが直ちに、私達が言うところの「善」をもたらしことを意味するわけではない。人は、何かに帰属するために、切羽詰まった時には悪行をもなすものなのである。まだ若年の人間——とりわけ、人間関係を通して、それぞれの置かれた状況において自らの居場所をうまく獲得できなかった者——は、他者を排除したり、怒ったり、いじめたりすることにその特徴の多くが占められている——そういう特徴しかない場合もある——集団を形成する傾向にある。しかし、ここでは悪事は自己目的ではなく（社会心理学者は時折こうした誤った帰結に至る）、集団で働く悪行は、それを犯す者達に帰属意識をもたらすのである。それは、（共同体の一部であるという）「善」と（他者を痛めつけるという）悪行とが悪魔的な結びつきに至る、ある種のメカニズムと言える。こうした帰属集団とその部外集団との間のメカニズムは、私達大人には良く知られている。それには、（サッカーのスタジアムにおけるもののように）良性のものもあれば、（宗教における原理主義、レイシズム、あるいはナチズムのように）悪性のものもある。

攻撃は必ずしも「悪行」であるわけではない。それは、意義ある目的に資するものでなければ、攻撃という振る舞いのプログラム自体が、進化の過程で消えてしまうものなのであろう。

肉体的な苦痛を与えることが「攻撃の…訳者補充」最も確かな契機となるとの観察は、攻撃に関する研究の極めて初期段階のものに数えられる。苦痛の限界に達する者は、攻撃という習性を取り入れるのである。さらに、現代の脳研究は、私達の脳が苦痛を認知するシステム（いわゆる「ニューロンレベルの苦痛のマトリクス」(Neuronale Schmerzmatrix)）は肉体的な苦痛だけでなく社会的な排除や屈辱感にも反応するという画期的な事実を発見するに至った。社会的な拒絶が肉体的な苦痛と同じく「私達の脳のレベル」で知覚されることは、なぜ若年の人間が、彼らの肉体に物理的な力が増えられる時だけでなく、彼らが排除された、ないし辱められたと感じる時にも、他者に対して攻撃的な対応を行うのかということを読み明かすのである。だからといって、私達が若者を非難する、あるいは、彼らに対して何が正しくて何が間違っているのかをはっきりと言う（私の印象では、私達は今日こうしたことをほとんどしてはいない）ことをしてはならないわけではない。ともあれ、私達は若年の人間を辱めたり、冷笑したり、排除したりせず、事実に基づいて彼らに批判や意見を述べるべきなのであろう。

攻撃…それはどのような前提条件の下で社会的な調整作用 (Regulativ) として機能するのか？

人間が社会的に拒絶される（ないしは社会的な拒絶が生じて

いると感じる」ならば、「その者による…訳者補充」常に人間らしい攻撃は、その要求を伝える、一種の社会的な調整作用であることが実証されている。しかし、攻撃がこうした機能を果たすには、以下の三つの前提条件が満たされなければならない。第一に、個々人が内面に持つ攻撃的な感情が攻撃的なものとして本人に認識されねばならない。小さな頃から怒りや憤りの感情を出したことを理由に罰を受けてきた者は、しばしば、こうした攻撃的な感情を認識することを忘れてしまう。そうした場合、他者への攻撃に代わって、抑圧の感情、自傷行為、摂食障害、あるいは心身の症状が現れることになる。第二の前提条件は、怒りが問題を引き起こした彼女に向けられていることである。もっとも、怒りは、「正しい」方向には向かず、無関係で、通常はより弱い立場の者に「押し付けられ」がちである。このことは、現在の私達が行っている人間的な共同生活を規定している権力構造と相關関係を持っている。こうして、家庭内でネグレクトや暴力を体験している子どもや少年は、学校ないしはその他の公共の場所などで、家庭において生み出された攻撃的な能力を十分に発揮するのである。攻撃が調整作用の効果を持つ第三の前提条件は、それが社会的に受容される形で、つまり、その量や性質の点で適切なものとして、やりとりされることである。しかし、ここで挙げた三つの前提条件が満たされることはまずない。そのため、ここでいう攻撃は、多くの場合、社会的な調整作用としての可能性が損なわれるのである。

攻撃と意思疎通する技法について

「正しい」方向に向けられ、社会的に受容されるものとして、あくまでやりとりされるに過ぎないという意味での攻撃は建設的で、「良い」ものである。しかし、そのために適切な量が正しく選択されねばならない。中世の医師であるバラケルスス(Paracelsus)によるとされる、ある手段を治療薬とするか毒薬とするかを決めるものは、ただその量のみであるとの洞察は、攻撃にも当てはまる。攻撃したいという衝動が会話の途中で述べられるとすれば、それは最適な量が選ばれたものと言える。もちろん、口頭での攻撃と言っても、相手への尊敬に満ち、私情を交えずになされた異議の申立てから、感情にまかせた激しい口調のものまでの間で段階付けることも可能である。対話という段階を超える(大声で叫んだり、威嚇的な態度を取ったり、暴力を振るったりする)と、攻撃が果たすはずの意思疎通を図るという機能は、通常は、どこかに飛んで行ってしまう。このように量的に大きな攻撃は、誰かが、激しい、あるいは、生命に関わるような攻撃にさらされそうな時にもみ意味があるに過ぎない。その他の場合、過剰な、とりわけ肉体的な攻撃は、攻撃という意思疎通の循環を終わらせるものとなってしまふ。怒りないし憤りの感情を内心で受け止め、それを適切に表現できようになることが必要とされる。子どもや少年の多くは、そ

の置かれた家庭環境でこうしたことを学べる状況にはない。社会科、倫理、あるいは宗教の授業におけるロールプレイは、攻撃という意志疎通の技法を若年者が習得する上では大いに役に立つ。子どもや少年は、内面にある怒りや憤りの感情に気づき、そして可能な限りその感情を適切に表明する方法を習得する機会を持つべきであろう。攻撃という形で意志疎通をすることが許されない、ないし、できない状況に長期間あつた者は病んでしまうであろう。

攻撃のシステム：「下から上への衝動」(Bottom-Up-Drive)と「上から下への制御」(Top-Down-Control)

人が攻撃を行おうとする時、その脳内では何が起こっているのだろうか？ 攻撃的な衝動が生じる際に、最初に反応する脳の部位は、脳の両側の側頭葉深部に位置する不安中枢（「扁桃体」とも呼ばれる）である。行動観察を通して、私達によく知られている、不安と攻撃の感情がお互いに近接しているということ——つまり、不安は容易に攻撃へ移行するとともに、攻撃から不安が生じるという形で、両者の間で行ったり来たりすること——は、神経生物学的にもその対応関係が見出されている。そして、攻撃を行う際には、扁桃体の活性化とともに、常に、いわゆる島^{とう}という脳の部位にある反感中枢ないし嫌悪中枢が動員されることも明らかとなっている。さらに、受けた刺激の強さ

とは関係なく、ストレスホルモンであるコルチゾール(Cortisol)の分泌が増加して、ストレス遺伝子の活性化が生じ、呼吸、脈、血圧の変化を伴いながら、視床下部のストレス中枢と脳幹の興奮中枢も作用する。これらの、不安中枢、反感中枢、嫌悪中枢、及び興奮中枢という四つの要素が、人間的な攻撃の装置の「下から上への衝動」（私は「蒸気ボイラー動作」と言うことにしている）を構成している。仮に、私達の攻撃のシステムが単にこの四つの要素のみから成り立っているとすれば、私達の状況は爬虫類のそれと大きな違いはないはずであろう。

それでは、人間による攻撃と爬虫類の攻撃との間にはどのような相違があるのだろうか？ 人間の場合は、「下から上への衝動」の始動と同時に、いわゆる前頭前皮質 (Prefrontalen Cortex) と呼ばれる、前頭葉の最前部に位置する神経細胞のネットワークも始動し始める。このネットワークの任務は、自分が行うことが他者の視点からはどのように受け止められるかに関する情報を保存し、それを自由に使えるようにし続けることにある。神経学の研究者はこうしたネットワークの機能を「上から下への制御」と名付けている（私は「道徳的な制御中枢」と言うことにしている）。ある侵害や刺激に対して攻撃を行うか否か、行うとして、どの程度のものであるかについては、侵害や刺激を受けた者の脳内における「下から上への衝動」と

「上から下への制御」のネットワークにおける「やりとり」の結果たどりついた妥協によって決められる。こうした妥協の形成は意識のない無意識的に進行することになるのである（多くの場合、両者の組み合わせがその鍵を握る）。そして、その形成は、状況にもよるが、数分、数時間、あるいは数日といった限られた時間で足りる。攻撃的な反応が突然止まるか否かには、一方では「下から上への衝動」の強さが、他方では、「上から下への制御」の量の大きさが関わっている。しかし、両者の強さや大きさは、とりわけ遺伝的な気質という意味で、生物学的に所与のものでは決してない。むしろ「下から上への衝動」と「上から下への制御」のいずれもが、人が社会において体験した様々なことに強く影響されているのである。脳の構造への決定的な影響は、子どもや少年の時代において受けたものより大きなものはない。ある子どもや少年が生まれてからの最初の一八年間で経験する（あるいは経験しない）ことほど、その脳に深く、そして後々まで影響を与えるものはないのである。

神経生物学的に見た人間関係と教育の意義

攻撃装置における、いわゆる蒸気ボイラー動作を緩和する影響を与えるためには、子どもや少年にとっては、両親、親代わりの人々、教員といった大事な人との信頼関係が必要不可欠である。というのも、精神に安定をもたらす人間関係、信頼関係

を肌で感じること、周囲からの高い評価、そして愛情が、子どもや少年の身体内部において、オキシトチン（Oxytocin）といった結びつきや信頼に関係するホルモンなどの様々な神経伝達物質を活性化させるからである。オキシトチンは、扁桃体の興奮を終わらせる効果を有しており、それを通して、「下から上への衝動」をも止める効果を発揮しうる。しかし、若年者の伸直りする能力に注目すると、二つ目に挙げた要素、即ち、よく機能するニューロンによる「上から下への制御」が、少なくともより大きな意義を有している。それがよく機能することが、人間の制御能力にとって決定的な要素となるのである。もともと、それがよく機能するか否かは、前頭葉のネットワークが、自らの行いを他者がどのように感じるかに関する情報を本当に保存し、いつでも呼び出せるようにしたかどうかにかかっている。

人が生まれた段階では、後に攻撃システムにおける「上から下への制御」を担う、脳の前頭葉にあるネットワークは、いわば「白紙」の状態にある。このネットワークは、誕生後のニューロンの成熟に伴い、一歳から二歳にかけて、まず、その小さな子どもが行うことを他の人間がどのように体感するかについての情報を集め始める。それでは、こうした情報はその子どもの脳の中でどのような経路を通じて集積されるのであるか？この点について言えば、こうした情報の集積は、私達がこれまで

教育と呼んでいる、長い期間の対話の過程という枠組みの中で行われているのである。この過程の中心的な特徴は、私達が一歳から二歳くらいまでの子どもを、愛情豊かに、しかも、一貫性を持って、良い共同体にとつての大前提であるルール、すなわち、(その共同体においてなすべきことを行うに際して) 衝動を制御すること、(他者を) 待つこと、そして(他者と) 分かち合うこと、を身につけられるように指導することにある。こうした社会におけるルールを順守できるようになる教育というものは、私達の脳を構成する特徴に基づく限り、子どもの「本性」に反対するように仕向けられたプログラムでは全くない。むしろ、子どもや少年に対するそうした教育に手を抜く者は、若年者の脳の最前部にあるネットワークの成熟に悪影響を与えているのである。

教育的な働きかけの二本柱

教育的な働きかけの任務は、少なからず、私達の脳を爬虫類のそれと違うものにする前頭葉の最前部にある部分を機能させることにある。こうした働きかけをものは行う気もなく、あるいは行うことができないだけでなく、学校におけるそうした働きかけを受けさせないようにする両親は、その子ども達にかえってとんでもない迷惑をかけている。愛情が無ければ何も進まないことは疑う余地もない。しかし、愛情だけでは十分ではない。

神経生物学的な観点から見ると、全ての良い教育的な働きかけは、二つの柱の上に成り立っている。第一の柱は、あらゆる若者がその誕生の日から必要としている、他者からの相手の立場に立った思いやりや支援である。そして、第二の柱は、一歳から二歳が終わるまでの間に始まる、社会的なルールを守れるように、子どもに対して一歩一歩根気強くなされるべき指導である。こうした教育的な取り組みは青年期の終わりまでになされなければならず、しかもそれは、その大部分が学校の教員(及び両親)の双肩にかかっているのである。周知のように、今日の社会においては、こうした負担の大きい働きかけが、子どもの家庭から学齢期前の教育機関に任される傾向がより強まっている。学齢期前の教育機関の数が少ない、あるいは、終日保育を実施する機関がないという州では、この二本の柱が両方とも欠けたまま成長していく若者が少なからず生じることになる。子どもや少年に対する思いやり、勇気づけ、そして保護があつて、社会的なルールを守ることに向けた指導が成り立つ。このことが忘れられてはならないのである。

参考文献

- Joachim Bauer, Schmerzgrenze Vom Ursprung alltäglicher und globaler Gewalt, Blessing, 2011.
Joachim Bauer, Lob der Schule, Heyne Verlag, 2007.

解題

ヨアヒム バウアーは、神経生物学専攻の医学博士であり、内科及び精神科の医師、さらには心理療法師として活躍する傍ら、フライブルク大学教授として教育にも携わっている。一九九六年には、ドイツ生物精神医学会から、その業績に対して、名声の高い「Organon賞」の授与を受けた。著書としては、本稿の素材となった「Schmerz Grenze, Karl Blessing Verlag, 2011」や「Das Gedächtnis des Körpers, Piper Verlag, 2004」の他、多数のものがある。

本稿は、二〇一三年九月一四日から一七日の期間にドイツ連邦共和国のニュルンベルクにおいて、ドイツ少年裁判所・少年審判補助者連合 (Deutsche Vereinigung für Jugendgerichte und Jugendgerichtshilfe : DVJ)⁽¹⁾主催で開催された「第二十九回ドイツ少年裁判所会議 (Deutscher Jugendgerichtstag) の初日にバウアー教授が行った、「神経科学の観点から見た、子どもや少年による攻撃、暴力、及び平穏を取り戻す力」(Aggression, Gewalt und Friedenskompetenz aus neurowissenschaftlicher Sicht)と題する学術報告がその契機となっている。この学術報告を拝聴した訳者が、それを日本語に翻訳して公表したい旨、バウアー教授にお願いしたところ、バウアー教授から報告をまとめられた原稿を頂戴するとともに、

その翻訳及び公表の許可を得て訳出した次第である。なお、バウアー教授から翻訳の対象となる原稿を頂戴した後に、それとはほぼ同じ内容のものが公表された⁽²⁾。

本稿の内容を要約すれば、以下のようになる。神経生物学の知見によれば、子どもや少年による暴力を含む、他者への攻撃は、脳内の神経が一定の規則に従って機能することによって生じており、人間が生きていく上で必要不可欠なものでもあるが、一定の前提条件が満たされれば、社会に受容される一種のコミュニケーションともなりうるし、暴力という、社会的に許容されない形をとることもある。この意味での攻撃がどのような形をとるかは、肉体的な苦痛のみならず、社会的な排除や屈辱感が限界に達する場合に、蒸気が噴き出すような「下から上への衝動」と、それを制御する「上から下への制御」との関係で決まる。この「下から上への衝動」と「上から下への制御」は、いずれも、人間が社会において体験したことに影響されており、とりわけ生まれてから成人となるまでの間に経験したことが、これらに決定的な影響を与える。そこで、「下から上への衝動」を緩和すること、あるいは、「上から下への制御」を強めることが、攻撃を適切なものとするために求められることになる。従って、これらを実現することが喫緊の課題となるが、それには、両親や教員といった、子どもや少年にとって重要な人物との間の信頼関係やそうした人物からの愛情だけでなく、誕生から幼少期にかけて、周囲の者がその子どもを温かく受容しなが

ら、教育していくことが必要不可欠である。とりわけ、「上から下への制御」が強められるためには、その子どもが生まれたときから、その子どもの立場にたった思いやりや支援があることと、社会的なルールを守るように周囲の大人が根気強く指導することという二本の柱に支えられた教育的働きかけがなされなければならない。

以上のように、本稿は、ドイツの少年司法において頻繁に論じられてきた少年による暴力犯罪の予防に向けて必要な教育的な働きかけのあり方について、生物神経学の観点から新たな知見を提示したものであるという点に、まず、その意義があると言えよう。

しかし、本稿の意義は、以上の点に尽きるものではないように思われる。

日本において、幼少期に被虐待経験を持つ者が非行少年にならずに見られることが明らかとなり、そうした非行少年に対して、その再非行を防ぐという観点から、どのような手続や処遇が採られるべきか論じられるようになってある程度の時間が経過した^⑤。そして、近時、幼少期に受けた虐待によって脳に損傷を受けたことと、非行・犯罪との関連性が指摘されるようになった。例えば、渡邊泰洋は、近年、欧米諸国では、幼児期などに受けた脳損傷が青少年期の行動障害となって現れる問題が刑事司法や少年司法の各機関で議論されており、日本においても虐待による脳損傷が原因で非行や犯罪を行った少年が多数含

まれていると思われるとして、実態調査に基づいて、刑事司法機関、とくに刑務所、保護観察所、少年院の専門家に加え、精神医学や法学の研究者らから構成される学際的研究を構築する必要がある、問題の把握と支援策を検討すべきであろうと指摘している^⑦。

もつとも、イギリスにおける研究によれば、早期に脳損傷の診断と少年への介入がなされれば犯罪予防の手段となりうるが、そうしたリスクを抱える者への十分なリハビリテーション的支援が受けられないと、その後の行動変容が不能となるとも指摘されている^⑧。さらに、家庭裁判所調査官による社会調査においてリスクアセスメントの知見を参照しようとする傾向が顕著であること^⑨に鑑みると、非行ある少年に被虐待体験や脳損傷が見られることが再非行リスクを高めるとして、被虐待等による脳損傷に関する研究が当該少年の隔離を推進する論拠として活用される危険性がある。

この点、本稿においても、確かに、虐待や社会的孤立などの被害体験によって、脳の構造に決定的な影響を与えられることが示されている。現に、バウアー教授の報告においても、虐待等の被害を受けた経験のある犯罪少年の脳内の神経の変成がCTやMRIの画像を通して提示された。しかし、本稿において注目されるべき点は、こうした少年において「攻撃装置における、いわゆる蒸気ボイラー動作を緩和する影響を与えるためには、子どもや少年にとって、大事な人との信頼関係が必要不可

欠である。というのも、精神に安定をもたらす人間関係、信頼関係を肌で感じること、周囲からの高い評価、そして愛情が、子どもや少年の身体内部において、結びつきや信頼に関係するホルモンなどの様々な神経伝達物質を活性化させるからである」というところにある。即ち、被虐待などの被害経験があり、脳損傷を受け、暴力的な犯罪に走った少年であっても、その少年を温かく受容する、真の意味での教育を通して、社会における規範を守る大人に成長できるという点に本稿のもう一つの意義があると言えよう。つまり、本稿は、たとえ被虐待や社会的疎外などの被害経験によって脳に損傷が見られる少年であっても、温かい受容的な教育を通して、その問題点を克服し、適切に成長発達しうることを示した点でも注目されるべきなのである。なお、パウワー教授の報告において、真の意味での教育的な働きかけを受けた少年の脳内の神経が通常の状態に変化した画像も提示された時に、聴衆が大きくどよめいたことは訳者にとって大変印象深い出来事であった。

近時大きく報道された少年事件においても、被虐待や社会的に疎外される経験を持つ少年が非常に攻撃的な非行に走ったとされるものが見られる⁽¹⁰⁾。今後、こうした少年がどのような手続を通して適切に処遇されるべきかが論じられるにあたって、また、少年司法において医学的知見がどのように活用されるべきかを検討する際にも、本稿は常に参照されるべき価値があるもののように思われる。

(1) DJVは、一九一七年に設立された、ドイツにおいて最大にして最も活動している少年司法に関係する団体であり、裁判官、検察官、弁護士だけでなく、少年裁判補助者(Jugendgerichtshelfer/innen)、保護観察官、研究者、警察関係者、少年行刑関係者など少年司法に関する多様な職種の者をその会員としており、ドイツの少年司法に関する重要なテーマを議論する、少年裁判所会議を三年に一度開催している。ドイツ少年裁判所・少年審判補助者連合(武内謙治訳)『ドイツ少年刑法のための諸提案』(現代人文社・二〇〇五年)一三四頁以下参照。なお、今回の少年裁判所会議は第一回会議から百周年となるということを理由に、第二九回会議の四年後にあたる二〇一七年に開催されることとなった。

(2) Vgl. Joachim Bauer, Aggression und Friedenkompetenz aus Sicht der Hirnforschung, Zeitschrift für Jugendkriminalrecht und Jugendhilfe, 2013, S.357-359.

(3) 少年による暴力犯罪の増加が近年ドイツにおいて問題とされてきたことについては、九州刑事政策研究会「クラウス・ベアスIIヨスト・ライネケほか『少年犯罪—年齢の経過と関係の解釈』Düsbungの経過調査研究『現代都市における犯罪』の結果』」法政研究七七卷三号(二〇一〇年)五五三頁以下参照。

- (4) 板垣嗣廣他「児童虐待に関する研究」法務総合研究所研究部報告一一号(二〇〇一年)九四頁以下、日本弁護士連合会「検証少年犯罪」(日本評論社・二〇〇二年)一三〇頁以下、家庭裁判所調査官研修所「重大事件の実証的研究」(司法協会・二〇〇一年)四二頁以下参照。
- (5) 例えば、藤岡淳子『非行少年の加害と被害』(誠信書房・二〇〇一年)一六二頁以下参照。
- (6) 渡邊泰洋「Brain Injury」に関する少年司法政策の課題」比較法政研究三五号(二〇一二年)一〇五頁以下参照。
- (7) 渡邊泰洋「脳損傷(brain injury)と刑事政策」犯罪と非行一七六号(二〇一三年)一九八頁参照。
- (8) Cf. Huw Williams, Giray Cordan, Avril Mewaw, James Tonks, Crispin Burgess, Self-Reported Traumatic Brain Injury in Male Young Offenders: A risk factor for re-offending, poor mental health and violence?, *Neuropsychological Rehabilitation*, Vol.20, 2010, p.15.
- (9) 例えば、いわゆる「調査支援ツール」においては、少年が深刻な虐待や過度の体罰を受けたことは暴力的な問題解決方法を学び、他人との愛着関係を結んだり、他者に共感することができず、理由があれば暴力をふるっても構わないという信念を強めるという形で、再非行リスクを高めるものとして位置づけられているように見受けられる。田川

二照ほか「非行類型に応じた少年事件調査の充実に向けて(1)」家裁月報六三卷一〇号(二〇一一年)一〇八頁参照。

(10) 例えば、いわゆる石巻事件はその典型と言えよう。石巻事件に関する第一審判決の問題性については、本庄武「少年に対する刑事処分」(現代人文社・二〇一四年)三四三頁以下参照。

〔付記〕

本稿は、学術研究助成基金助成金(基盤研究(C))「効果的な再非行防止に向けた家庭裁判所と関係諸機関との連携に関する基盤的研究」(課題番号・二六三八〇〇九四)の成果の一部である。